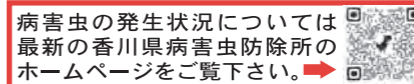


令和6年産 中生水稲(ヒノヒカリ)栽培しおり



JA香川県東讃営農センター(大川地区)
監修:香川県東讃農業改良普及センター

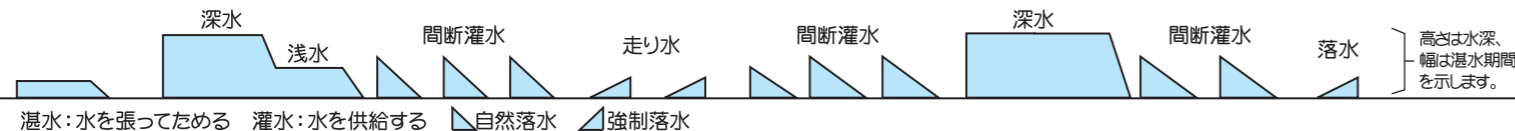
土づくりのため、堆きゅう肥等の積極的な施用に努めましょう。また、稲わらや麦わらは焼かずにすき込みましょう。

作業の目安

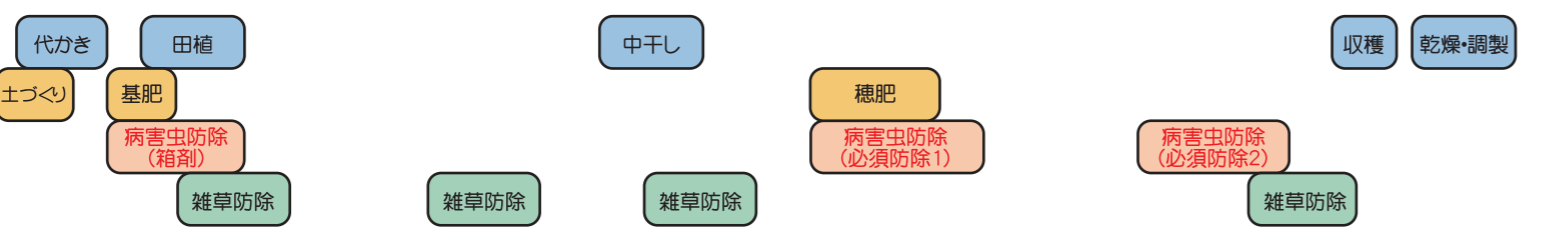
作業 品種	田植日	間断灌水開始 (田植後15日)	中干し期間	穂肥施用 (出穂18日前)	出穂期 (ほ場全体の 4~5割が出穂)	収穫期
ヒノヒカリ クレナイモチ	6月15日	6月30日	7月15日~8月2日	8月9日	8月27日	10月6日~10月11日
	6月20日	7月5日	7月20日~8月4日	8月11日	8月29日	10月8日~10月13日
	6月25日	7月10日	7月25日~8月6日	8月13日	8月31日	10月10日~10月15日

*中干しは、田面にできるヒビ割れが1cm程度までとします。強い中干しは、根を痛める原因となります。

水管理



栽培管理



○刈取り後は2時間以内は乾燥に移す。
刈取時の籾水分は25%前後とする。
○籾の80~90%が黄変したら刈り取る。
○カントリーエペクターへ出荷する。
◎出穂10日前、出穂10日後(灌水管理時)。
◎穂ばらみ期から穂刈り期まで10日前までに行う。
◎カラムシ類の対策として、駐畔などの草刈りを行う。
◎カラムシ類の対策として、駐畔などの草刈りを行う。
●(病害虫防除基準を参照)カラムシ類等の防除を行う。
●出穂前・出穂後、紋枯病、カメムシ類の施用時期は出穂18日前。
●中干し時の田面が黒くなるのを防ぐ。
◎初期病害虫防除のため、必ず粒剤を散布する。
◇代かきはできる限り均平に行う。
◇(施肥基準を参照)耕前や土壌改良資材を散布する。

植付本数	3~4本
株間	18~22cm (18.5~15.2株/m)



施肥基準

肥料名	窒素-リン酸-加里 N-P-K (%)	総量	基肥	穂肥I (出穂18日前)	穂肥II (出穂10日前)	備考
スーパー固形400J	14-10-10	55(45)	55(45)	-	-	ワンジョット肥料
スーパーブレンドLP40	14-14-14	60	35	25	-	ツージョット肥料
高度化成402	14-10-12	65(60)	35(30)	20	10	速効性肥料

注()は、側条施肥の場合

資材名	総量	基肥	出穂 35日前頃
粒状ろがねシリカ	100	100	-
苦土一番	40	40	-
けい酸加里	20(40)*	(40)*	20

*けい酸加里を基肥で使用する場合は、10aあたり40kgとする。

肥料名	窒素-リン酸-加里 N-P-K (%)	総量	基肥	穂肥 (出穂18日前)
牛ふん堆肥	-	1000	1000	-
コーン堆肥	-	4000	4000	-
スーパーブレンドLP40	14-14-14	50	30	20

- ＜留意事項＞
- 堆肥を施用し土づくりに努める。
 - 中山間地帯及び地方の高いほ地では減肥する。
 - 牛ふん堆肥は水稲作付けの前年秋に施用することが望ましいが、遅くとも田植30日前までに施用し、すき込み込む。堆肥1,000kg当たり基肥で窒素1kg、穂肥で窒素1kg分を減らす。
 - 麦わらをすき込み込む場合は、わらの腐敗に伴うフキ現象のため、間断灌水をするなど水管理に注意する。
 - コーン堆肥を使用する場合は、作付けの前年秋を目安に施用し、遅くとも12月までに施用する。
 - 堆肥やコーン堆肥を連年使用すると地力が向上するので肥料の施肥量を減らす。
 - 被覆肥料のマイクロプラスチックの流出には十分に気をつけること。



病害虫防除基準

＜必須防除＞

防除時期	対象病害虫名	使用薬剤及び10a当たり散布量
移植まで (緑化期~移植当日)	いもち病、紋枯病、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、コブノメイガ、イネミスジウムシ	ビルダーフェルテラチエスGT粒剤 1箱当たり50g散布
必須防除1 いずれか 混用 出穂20~15日前 (収穫45日前まで/1回)	いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウンカ類	ゴウケツモンスター粒剤 3kg
出穂10日前 (収穫35日前まで/1回)	いもち病、紋枯病、ウンカ類、カメムシ類	ワイドパンチ豆つぶ250g
出穂直前~穂揃期 (穂揃期まで/2回以内)	いもち病、紋枯病	ダブルカットバリダフロアブル1,000倍 100ℓ
出穂7日前まで/3回以内	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ	スタークル顆粒水溶剤 2,000倍100ℓ
必須防除2 いずれか 出穂7~10日後 (収穫7日前まで/3回以内)	カメムシ類、ウンカ類	スタークル豆つぶ 250g
出穂10~14日後 (収穫7日前まで/3回以内)		スタークル粒剤 3kg
		スタークル顆粒水溶剤 2,000倍 (50g/100ℓ)

＜確認防除＞

防除時期	対象病害虫名	使用薬剤及び10a当たり散布量 (使用可能時期/回数)
田植直後	スクミリンゴガイ	スクミン (粒剤) 1~4kg (収穫60日前まで/2回以内)
発生初期	いもち病、もみ枯細菌病	ブラシンフロアブル 1,000倍 (収穫7日前まで/2回以内)
出穂10~20日前	稲ことうし病	バリダシン液剤5 1,000倍 (収穫14日前まで/5回以内)
発生初期	紋枯病	パダントレボン粒剤L 3kg (収穫30日前まで/3回以内)
発生初期	ウンカ類、コブノメイガ、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ	

雑草防除基準

散布時期	除草剤名 10a当たり処理量	注意事項
初・中期除草剤(いずれか) 移植直後~9日 ノビエ2.5葉期まで (移植後30日まで/1回)	カチボシジャンボ 小包装 (パック) 10個 (300g)	●水深5~6cmで散布する。 ●散布後3~4日間は水深3~5cmを保つ。 ●藻類や浮草の発生が多い場合には、モグトン等で処理した後に使用する。
	カチボシフロアブル 500mℓ	●灌水状態で散布し、3~4日間は水深3~5cmを保つ。 ●藻類や浮草の発生が多い場合には、モグトン等で処理した後に使用する。 ●除草効果の低下や葉害が発生するため注意する。
	トップガンR豆つぶ250 250g	●水深5~6cmの灌水状態で散布し、散布後3~4日間は水深3~5cmを保つ。 ●藻類や浮草が発生した場合は、モグトン等で処理した後に使用する。 ●漏水田、極端な浅植田では葉害が出やすいため使用を避ける。
	ラオウ1キ口粒剤 1kg	●灌水状態で散布し、散布後から3~4日間は水深3~5cmを保つ。 ●高温時、漏水田、極端な浅植田では葉害が出やすいため使用しない。
中期除草剤 移植後20~30日 (収穫60日前まで/1回)	バサグラン粒剤 4kg	●初期除草剤散布後、広葉雑草が残った場合に使用する。 ●落水後またはごく浅水状態で散布し、3日間(ごく浅水処理は5日間)は入水しない。 ●散布後2日以内に降雨があると効果が不十分になるので留意する。
	移植後25日~ノビエ4.0葉期まで (収穫40日前まで/2回以内)	●初期除草剤散布後、ヒゲが残った場合に使用する。 ●水深5~6cmの灌水状態で散布し、散布後3~4日間は水深3~5cmを保つ。 ●藻類や浮草が発生した場合は、モグトン等で処理した後に使用する。
	移植後20日~ノビエ4.0葉期まで (収穫50日前まで/2回以内)	●落水後またはごく浅水状態で散布し、3日間(ごく浅水処理は5日間)は入水しない。 ●散布後2日以内に降雨があると効果が不十分になるので留意する。 ●高温時、軟弱苗、重複散布では葉害が出やすいため注意する。 ●展着剤は使用しない。
	移植後20日(稲5葉期以降)~ ノビエ4葉期 (収穫60日前まで/1回以内)	●水深5~6cmの灌水状態で散布する。 ●散布後3~4日間は水深3~5cmを保ち、7日間は落水、かけ流しはしない。 ●高温時、漏水田、極端な浅植田では葉害が出やすいため使用しない。

周辺環境のため農薬を散布した場合は1週間は落水しないようにする。

記載の薬剤の登録内容は令和5年11月26日現在の登録を基に作成しています。容器に記載されている農薬使用基準を確認してその範囲内で使いましょう。 農薬散布の際は、近接ほ場の栽培作物に農薬が飛散しないよう細心の注意を払いましょう。

栽培履歴を必ず記帳し、出荷開始15日前までに提出しましょう。毎年種子更新100%に取組みましょう。